

国際日本 研究センター NEWS LETTER ニューズレター

No. **07**
2012.3

東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies
<http://www.tufs.ac.jp/common/icjs>

・国際シンポジウム「曲亭馬琴をめぐる3つの提題～」開催	International Symposium "Kyokutei Bakin ~" Report	P1
・「中国語・日本語対照研究と日本語教育：量の表現」	Comparative Analysis between Chinese and Japanese Language Education	P2
・講演会「モバイル時代のコミュニケーションのゆくえ」報告	Lecture Report "Future of Social Communication in the Mobile Era"	P2 ~ 3
・第3回 若手研究者ワークショップ 開催報告	The 3rd Young Scholars Workshop Report	P3 ~ 4
・国際シンポジウム「戦前日本の対回教政策とトルコ」報告	"Japan's foreign policy towards the Muslim world in the pre-war era and Turkey"	P4 ~ 5
・「外国語と日本語との対照言語学的研究」第5回研究会 報告	Report "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 5th Research Seminar	P5
・インドからみた日本 Japan as seen from India		P6
・交流協定校紹介⑦ ハノイ国家大学人文・社会科学大学 Vietnam National University, Hanoi(VNU)		P6 ~ 7
・活動報告・イベントスケジュール Activity Report・Future Events		P8

国際シンポジウム「曲亭馬琴をめぐる3つの提題～」開催 2011年12月15日(木) International Symposium "Kyokutei Bakin ~" Report Thu. Dec 15, 2011



▲神田氏 ▲ベーリン氏 司会の川島氏▲

「曲亭馬琴をめぐる3つの提題—白話小説・演劇的表象・ベトナム文学」
報告者・報告タイトル：神田正行氏（明治大学）「化政天保期の『江戸作者』馬琴」、クリスチャン・ベーリン氏（ロンドン大学SOAS博士課程修了、大阪大学産学連携助教）

「寛政・享和期に於けるジャンル開発と馬琴の役割—ドラマ性と演劇性をめぐって」、川口健一氏（本学）「馬琴と阮攸—二つの作品をめぐる—」

12月15日（木）、本部管理棟2階中会議室で、比較日本文化部門+国際連携推進部門共催によって表記の国際シンポジウムが開催された。

神田氏は、馬琴が『南総里見八犬伝』を書くにあたって、中国白話小説である『八仙伝』をモチーフにしたと主張してきた先行研究に対する文献学的で根本的な批判・検討を展開された。ベーリン氏は、馬琴の作品群が、版元の要請・演劇的表象への挑戦・そして普遍的なドラマ性にもとづいていかに変遷してきたかという野心的な読みを示された。そして川口氏は、明末・清初の『金雲翹伝』の翻案にみる馬琴とベトナムの阮攸（げんゆう）との比較文学的考察を示された。神田氏の文献学研究の徹底による論証と、豊富な黄表紙を用いたベーリン氏の表象分析という、対照的な方法論。そして、国際的な文学研究を視野においた川口氏の問題提起。いずれも手堅い方法にもとづきながら、文学研究のエッジを横断する刺激的な報告であった。馬琴の文学的営為は長大かつ膨大であるが、ポイントを得た三者の報告によって、俗説・通説とは異なる馬琴像がうかがいあがったといえよう。さらに討議では、八犬伝と水滸伝との関連、山東京伝と馬琴との交錯、そして稗史小説をめぐる歴史と文学との関わり、翻案という営為が持つ意匠など多岐にわたる論点をめぐって意見が交換された。参加者は15名と少なかったのが残念であったが、国際文学研究のスリルと醍醐味に満ちたシンポジウムであった。

（比較日本文化部門+国際連携推進部門）

"Three clues around Kyokutei Bakin: Vernacular Chinese (hakuwa) literature, Theatrical representation and Vietnam literature"

Lecturers and titles:

Masayuki Kanda (Meiji University) "Bakin, 'Edo Writer' of the Kasei Tempo Period";

Kristian Bering (completed PhD course at London SOAS, Assistant Professor, Osaka University Office for University-Industry Collaboration) "Genre Development in the Kansei Kyowa Period and the Role of Bakin dramaticity and theatricality";

Kenichi Kawaguchi (TUFS) "Bakin and Nguyễn Du their works"

On 15 December (Thu), the Comparative Japanese Culture Division and the International Cooperation Division co-hosted the above international symposium in the medium conference room, 2F administration offices. It was a symposium on contrastive methodologies as Prof. Kanda demonstrated through a thorough research on philology and Prof. Bering analyzed expressions using a rich variety of kibyoshi (Japanese picture book). Prof. Kawaguchi raised issues from the perspective of international literature research. All three reports were stimulating, and based on sound methodologies that traversed the edge of literature research. Bakin's literature is long and massive but through the succinct reports of the three lecturers, the audience gained a picture of Bakin which was different from the popular and common views. It was a symposium which captured the thrills and real charms of international literature research.

(Comparative Japanese Culture Div. + International Cooperation Div.)



「中国語・日本語対照研究と日本語教育：量の表現」

言語研究と教育シリーズ第2回研究会：国際日本語教育部門

[Language Studies and Education] The 2nd Research Seminar : Comparative Analysis between Chinese and Japanese and Japanese Language Education : Quantifier expressions

2011年12月2日に「中国語・日本語対照研究と日本語教育：量の表現」（於アゴラ・グローバル プロメテウスホール）が開催された。発表者は、張麟声氏（大阪府立大学：タイトル「中国語と日本語の数量表現の双方向習得研究」）と彭広陸氏（北京大学：タイトル「中国語と日本語の主観量表現の対照研究」）である。



【彭広陸氏】

張麟声氏は、記述研究の方法として対照研究が安直に考えられている点を指摘した上で、第二言語習得研究と言語研究それぞれにおける対照研究の重要性を主張された。第二言語習得研究では「規則発見型」の研究方法が主流であるが、張氏は、「仮説検証型」モデル（対照研究・誤用観察・仮説検証の三位一体の習得研究）による言語転移の扱いについて提案された。つまり、最初に対照研究によって言語転移の可能性を見出し、次に学習者の産出言語を観察し、習得状況に関する仮説を立て、最後に様々な調査を通して検証を行うというものである。その例として、日本語と中国語の数量表現を挙げ、構文的位置の相違により、日本語で副詞的に使われる基数詞表現が、中国語では形容詞的に使われることから、言語転移が見られる点を指摘された。また、言語研究のための対照研究を、①記述を進めるための「先例参照型」②現象の記述を進めるための「難局打開型」③類型的特点を捉える「類型設定型」④普遍性を追求するための「本質追求型」の四つに分類された。

彭広陸氏は、日本語と中国語の主観的（評価的）な表現について、140枚に上る資料により、夥しい例を挙げられ、日中両語の対照研究の緻密な分析例を示された。中国語の主観量の多数量を示すものは「充足型」（「足有る」「不下」等）「到達型」（「达到」「多达」等）「超過型」（「超」「过」等）「接近型」（「近」「接近」等）「変化型」（「已经」）「取立型」（「整整」「足足」等）「意外型」（「竟然」「居然」等）などに分けられる。また、少数量を示すものには、「不充足型」（「不足」等）「未到達型」（「不到」等）「未超過型」（「不过」等）「限定型」（「仅」等）「描写型」（「寥寥」等）に分類される。一方、日本語では、「も」＋肯定形により多数量、「も」＋否定形により少数量が示される。その他、多数量としては、「到達型」（「登る」「及び」等）「超過型」（「突破する」）「範囲型」（「（に）わたる」）少数量では、「不充足型」（「（に）満たない」）「取立型」（「しか～ない」等）「限定型」（「わずか」等）に分類される。また、中国語を母語とする日本語学習者にとって連体修飾（例：「約30パーセントもの夫婦」）の形の習得が難しい点も指摘された。

当日は、20名ほどの参加者が集まり、中国語を母語とする日本語学習者の言語転移等に関する質疑応答が交わされた。（谷口龍子）

The seminar "Comparative Analysis between Chinese and Japanese and Japanese Language Education: Quantifier expressions" was held on 2 December 2011 (at the Agora Global, Prometheus Hall). The lecturers were Zhang LinSheng, Osaka Prefecture University (Research on Acquiring Quantifier Expressions in both Chinese and Japanese), and Peng Guanglu, Peking University (Contrastive Research on Subjective Quantifier Expressions in Chinese and Japanese).

Prof. Zhang emphasized the importance of contrastive research in the respective fields of second language acquisition research and linguistic research. In research on second language acquisition, he proposed handling the issue of language transfer based on a model of "hypothesis verification" (acquisition research based on a three-prong approach of contrastive research, error observation, and hypothesis verification). In other words, it is a model to first detect the possibility of language transfer based on contrastive research, observe the language produced by the learners, then frame a hypothesis regarding the acquisition pattern, and finally to verify the hypothesis through various surveys.

Prof. Peng introduced the different types of subjective (evaluative) expressions in Japanese and Chinese. In Chinese, the subjective quantifiers to express "many" are the "sufficient type," "achievable type," "excessive type," "approaching type," "transforming type," "focused type," and "unexpected type." Quantifiers expressing "few" are the "insufficient type," "non-achievable type," "non-excessive type," "restrictive type," and "descriptive type." On the other hand, Japanese uses "mo" + positive form to express the former type, and "mo" + negative form to express the latter. Prof. Peng also pointed out that the acquisition of modifiers of noun-inflectable words (e.g., yaku 30 paasento mono fuufu) is difficult for native-Chinese Japanese learners.

About twenty people participated in the seminar and many questions such as the language transfer of native-Chinese Japanese learners were asked.

(Ryuko Taniguchi)



【張麟声氏】

講演会「モバイル時代のコミュニケーションのゆくえ」報告 2012年1月23日(月)

Lecture Report "Future of Social Communication in the Mobile Era" Mon. Jan.23, 2012

1月23日（月）18時から、社会言語部門主催の講演会を行った。講師は東洋大学文学部の三宅和子氏。「モバイル時代のコミュニケーションのゆくえ」のタイトルで行われた講演は、コンピュータや携帯電話などのパーソ

A lecture by Professor Kazuko Miyake, Faculty of Literature, Toyo University, entitled "Future of Social Communication in the Mobile Era," was held on 23 January 2012. The points raised in the lecture included

ナル・メディアがもたらしたコミュニケーションツールの変革と、そこで使われる様々な「約束事」が、これまでになかったコミュニケーションの形を産出しているという視点が提示された。対人関係を距離の近いものから順に「ウチ」「ソト」「ヨソ」と分けた場合、ネットが媒介することで「ヨソ」との接触がこれまでになかった頻度で起こるようになる。もちろん「ヨソ」が「ウチ」へと変わるということではなく、「ヨソ」が「ヨソ」のまま、コミュニケーションの機会が増えるのである。人類の歴史の中でメディアの「革命」はコミュニケーションのあり方を変えてきた。印刷物の普及、電波音声メディアの登場などもそれにあたるが、しかしながら、対人コミュニケーションは、対面がデフォルトであり続けた。対人関係に依拠しない別のコミュニケーション世界ができることで、これを「非現実」と呼ぶには、特に若い世代ではリアリティがありすぎるのだ。

さらにこれまでのコミュニケーション研究になかった視座として、「受け手の研究」についての言及があった。携帯メールの文面の分析を通じて三宅氏が到達した一つの結論は、「受け手依存型のコミュニケーション」であった。具体的な事例として、怒っていることを暗に伝えるために用いられるストラテジーが紹介された。短い文面、絵文字などの使われ方が少ない、などのいくつかのメタファーから、受け手が「察する」という約束事ができあがっている。伝えたいことをストレートに表現しないコミュニケーションが、若者に使われているという分析が示された。絵文字というツールは実は日本独自のもので、三宅氏は需要があったからこそ発達したとの説明をする。日本以外からの参加者からは、その点について質問がいくつかあった。

また、質問やコメントの中に、三宅氏のデータは、特定の年代の（若い世代）、特定の性別（女子学生のデータが多かった）に限られるのではないかと、いうものが集中した。また現役の大学生からすると、少し古い感じがするというコメントも見られた。

ここに社会言語学のおもしろさと、難しさが共存している。つまり、動態を切り取る作業が要求される実際のフィールドでは、データを集めた時にはすでになんらかの「偏り」が生じ、分析が終わったときにはすでに古いものになってしまう可能性があるのだ。

こういったある種のディレンマを抱えながらも、常に新しい情報を入力し、分析し、発信し続ける、という作業を続けることに、この種の共時的なテーマを扱う際には意味を見いだす必要があることも考えさせられた。

（前田達朗）



the following: the progress of IT on an individual level is changing the nature of communication that has been carried out between people so far, and accordingly, communication strategies have also changed, and the important role emoji (emoticons, a unique Japanese form) plays. Questions and comments centered on whether or not this was happening only in a particular demographic group. This lecture provided an opportunity to reflect on the difficulties of sociolinguistics, a research field that tries to capture the changes in languages.

（Tatsuro Maeda）



【三宅和子氏】

第3回 若手研究者ワークショップ 開催報告 2011年11月11日(金) The 3rd Young Scholars Workshop Report

全東園氏「近代日本の「朝鮮文化財」調査・研究に関する一考察—1900年代初頭における八木奘三郎の「韓国調査」を中心に—」2011年11月11日 本部事務棟中会議室

本報告は、1900年に朝鮮半島の文化財調査に乗り出した東京帝国大学理科大学人類学教室の八木奘三郎（1866-1942）の活動を詳細に跡付けるものであった。当時、日本ではまだ人類学と考古学の区別が明確ではなく、朝鮮半島では「国宝」あるいは「宝物」、さらに近代的な美術に関する認識が定着する以前の時期にあたる。こうした時期における八木の調査は、整理分類という研究方法を韓国の文化財や美術品に適用することで、近代的な学問の対象として「可視化」「客体化」した。当然ながらそうした「可視化」「客体化」は朝鮮半島の文脈から離れて文化財や美術品が日本の文脈に包摂されることを意味する。その調査・研究には朝鮮人の参加は一切許されなかった。しかしまたそうした回路をとってはじめて朝鮮の文化財・美術品は歴史の舞台に登場したといえる。そしてその調査が近代「韓



【全東園氏】

"Art and cultural Assets in Korea" in 1900-1910: Focusing on Research and Ideas of Sosaburo Yagi" by JUN Tongwon (PhD Candidate, Tokyo University of Foreign Studies "TUFS") held on Fri. Nov.11, 2011

国」の文化財をめぐる学知を形成することになる。しかもそこでは、全報告が対象にした八木のような個人が切り開き、文脈を形成していったのである。

人類学調査から考古学、文化財、美術品調査へと推移していった八木の軌跡がそうした「帝国の学知」の形成過程を物語っている。一例をあげれば、全報告は八木の「学知」の形成過程について、調査経費の出所＝パトロンの精査とともに、その関心が人類学的・考古学的調査であったことに注意を促している。すなわち、学術的関心と個人的な動機がどのように組み合わされることで「帝国の学知」が形成されたかをたどるのである。

すでに岩波講座『「帝国」日本の学知』がシリーズとして刊行されているように、東アジアにおいても植民地主義と近代的学知の形成についての研究は不可分である。しかし、文化財をめぐる「帝国の学知」の研究はまだ端緒についたばかりである。その意味で報告者の研究が今後の帝国と学問をめぐる研究分野に与える意味は大きいといえよう。(友常勉)

This workshop traced the activities of Sosaburo Yagi (1866 - 1942), an anthropologist from the Tokyo Imperial University Science College Anthropology Department who embarked on a survey of cultural assets in the Korean Peninsula in 1900. By applying his research method of organization and classification to the cultural assets and art in Korea, Yagi was able to "visualize" and "objectify" them as modern academic research items. Of course, "visibility" and "objectivity" meant that the cultural assets and art were taken out of the Korean peninsula context and subsumed under a Japanese one. From anthropological survey, to archaeological survey, to cultural assets and art survey, Yagi's footsteps traced the development process of "imperial knowledge." As seen in the published series "Academic Discourses of Empire in Modern Japan" from Iwanami Shoten, imperialism and the development of modern knowledge even in East Asia are inseparable. In that sense, the significance of this presentation to research on empires and knowledge in the future is certain to be huge. (Tsutomu Tomotsune)

国際シンポジウム「戦前日本の対回教圏政策とトルコ」報告 2012年1月28日(土)

International Symposium: "Japan's foreign policy towards the Muslim world in the pre-war era and Turkey" 28 January 2012 (Sat)

三沢伸生氏(東洋大学)

「アジア主義とイスラーム主義の交錯：亜細亜義会をめぐって」

メルトハン・デュンダル氏(アンカラ大学)

「スユンビケの涙 在日トルコ系住民と戦前日本の外交政策」

小松久男氏(東京大学)

「イブラヒムの夢：イスラーム世界と日本を結ぶ」

開場：東京外国語大学 研究講義棟 115室

戦前日本政府の大陸政策と、アジア主義を標榜した日本知識人たちの活動は、イスラーム文化圏との接触を生みだしていた。1940年代初頭に大東亜共栄圏構想にまとめあげられていくそうした外交政策と思想運動は、しかし、イデオロギー上の建前だったのでも、観念的なかけ声だけだったのでもない。そこでは、国境を越えて活躍しながら民族的統一の理想に燃えた知識人たちと、それを受け止める豊かな政治的感受性が交錯する空間が現出していた。対イスラーム圏政策＝「回教圏政策」を大きな枠組みとして、中央アジア出身のトルコ系知識人と日本の知的接触を丹念に読み解こうとしたこの国際シンポジウムは、期せずしてそうした場＝トポスを描き出すことに成功したといえよう。

三沢氏は明治期から戦中期までのアジア主義とイスラーム主義の連帯の実践とその「失敗」の歴史を、近年の機関誌資料などの発掘の成果を踏まえて提示された。辛亥革命に連動したアジア主義とイスラーム主義の結合の試みであった「亜細亜義会」の帰趨は、他のアジア主義の思想運動に重なる。デュンダル氏は在日トルコ系住民たちが戦前日本で形成したさまざまなコミュニティの活動、とりわけロシア出身のトルコ・タタール人の活動に焦点をあてながら、それが国際政治情勢のなかで翻弄されていく軌跡を描きだした。そして小松氏は、明治期に来日し、1933年に再来日し1944年に日本で客死した、汎イスラーム主義のジャーナリストであったアブデュルレシト・イブラヒムの生涯を縦軸としたダイナミックな歴史を示した。そのイスラーム世界解放と日本との連帯の戦略、その戦略に呼応する日本の興亜主義＝アジア主義者たち、さらに公然とあるいは非公然にその活動を支援する日本陸軍。そうした政治世界を踏まえて、小松氏はロシア(タタールスタン)ートルコー日本の三角形を前提とした歴史研究の必要性を提起された。

汎アジア主義と汎イスラーム主義はそれぞれ民族主義と革命、戦争の時代における世界規模の反西洋の国際思想運動であった。しかしその思想運



Lecturers and titles:

Nobuo Misawa (Toyo University), The Meeting Between Pan-Asianism and Islamism: Regarding the Ajia Gikai (Asia Assembly)

Ali Merthan Dundar (Ankara University) Turkey, Tears of Suyunbike: Turkish residents in Japan and pre-war Japanese international policies

Hisao Komatsu (The University of Tokyo), The Dream of Ibrahim: Connecting the world of Islam and Japan

Prof. Misawa explained the history of attempts to establish solidarity between Pan-Asianism and Islamism from the Meiji Period to the war and its "failure" through research on bulletins, etc. in recent years. Prof. Dundar explained the activities of various Turkish communities living in pre-war Japan, and focused on a particular Russian-born Turk-Tatar's activities and how his life was heavily influenced by the contemporary international political situation. Prof. Komatsu explained the dynamic



【2列目右から 5番目三沢氏 6番目デュンダル氏 7番目小松氏】

動は実にミクロな個人の旅や小さな集まりがつながることで展開されていた。司会の林佳世子氏がまとめたように、こうしたマクロな政治とミクロな営みを往還する多様な回路の発見は、〈日本〉を新たに記述するための指針となるであろう。その意味で国際日本研究センターにとっても得難いシンポジウムであった。さらにそうした歴史研究は刺激的で新鮮である。参加者は70名。なおシンポジウム開催に先立って、アブデュルレシト・イブラヒムらの眠る多磨霊園のムスリム墓地を見学するツアーが企画され、厳しい冷え込みのなかではあったが、15名を超える参加者を得た。

(友常勉)

history of the life of a pan-Islamic journalist, Abdul Reshid Ibrahim, who came to Japan in the Meiji Period, came again in 1933 and then passed away in Japan in 1944. This symposium raised the necessity of having research on the histories of the three countries - Russia (Tatarstan), Turkey and Japan as a prerequisite, and the necessity of (Japanese) research in that relationship.

The symposium was attended by seventy people and a visit to the foreigners' cemetery at the Tama Reien Cemetery was also conducted before the event.

(Tsutomu Tomotsune)

「外国語と日本語との対照言語学的研究」第5回研究会 報告

Report "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 5th Research Seminar

対照日本語部門では、プロジェクトの一環として、次の研究会を開催した。

「外国語と日本語との対照言語学的研究」第5回研究会

日時：2011年12月17日（土）13:50～17:00

場所：東京外国語大学 語学研究所（研究講義棟4階419号室）

発表者・講演者と題目

宮島達夫氏（国立国語研究所名誉所員） 講演「コーパスによる日英比較」

藤縄康弘氏（本学大学院総合国際学研究院）

研究発表「受動化とアスペクト性：ドイツ語の非人称受動を中心に」

鈴木玲子氏（本学大学院総合国際学研究院）

研究発表「『の』に対応するラオ語」



【宮島達夫氏】

宮島氏は、国立国語研究所に長く在職なさり、国語研で早い時期から行われていた大規模な語彙調査を中心的にひっばっていらした。このご講演では、日本語と英語それぞれの大規模コーパスである「BCCWJ（現代日本語書き言葉均衡コーパス）」と「BNC（British National Corpus）」を用いたご自身の最近の調査にもとづいて、程度表現、食事に関する表現、移動表現、スポーツや動物の名などについて、両言語の興味深い異同が紹介された。また、コーパスのもつ「代表性」の問題、すなわち大規模コーパスといっても、実際の言語使用をどの程度に代表しているのかという難しさについてもお考えが述べられた。

藤縄氏はドイツ語の受動表現（werden受動・sein受動・bekommen受動）をめぐって、完了相と不完了相との関わり、その類型論的な性質について述べられた。まずwerden受動のうちでも非人称受動をつくるのは、もっぱら活動動詞の場合であることをコーパス調査によって明らかにされ、非人称受動は、sein受動やbekommen受動と異なり、不完了相に依拠するものであると述べられた。また、ある言語が非人称受動を許すか否かと、その言語において不完了相と完了相のどちらが有標であるかが相関するという展望も述べられた。

鈴木氏は、日本語の「N2+の+N1」という表現に相当するラオ語の表現（ラオ語では「N1+(x)+N2」）について紹介・分析された。「N2」の意味的な種類（所有主、対象、成員、主体、数値、時、……）、ラオ語の形（「N1+N2」「N1+前置詞+N2」「N1+類別詞+N2」……）、「N1とN2のむすびつき」（関係的、状況的、質規定的）とラオ語の形との関係などが整理され、両者の異同を示されるとともに、「N1+x+N2」の「x」の機能について述べられた。

今回の研究会にも、本学教員・大学院生のほか学外の方々も含め30名ほどの参加者があり、活発な質疑応答や意見交換が行われた。次回（第6回研究会）の予定は、3月3日（土）である。

(早津恵美子)

It was hosted by the Contrastive Japanese Division as part of the division's project as follows:

Date: Saturday, 17 December 2011, 13.50 to 17.00

Venue: Room 419 (Conference room, the Institute of Language Research) 4F, Research and Lecture Building

Presenters & Titles:

Tatsuo Miyajima (National Institute for Japanese Language and Linguistics, Honorary Member), "Corpus-based comparative analysis of Japanese and English"

Yasuhiro Fujinawa (Graduate School of Area and Culture Studies), "Passivization and Aspectuality: Focusing on non-personal passives in German"

Reiko Suzuki (Graduate School of Area and Culture Studies), "Lao corresponding to Japanese 'no' "

Prof. Miyajima has been with NINJAL for many years and played a leading role at the institute in many projects, especially a large-scale lexicon study which was started several years ago. He presented suggestive observations concerning similarities and dissimilarities found in frequency expressions, expressions about food, expressions of motion, sports and animal names, based on examples from his latest research which used examples from the "Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese" (BCCWJ) and the "British National Corpus" (BNC), large-scale corpora of the respective languages.

Prof. Fujinawa talked about the relationship between the perfective and non-perfective aspects concerning the passive expressions (werden, sein, bekommen) in German, and their typological characteristics.



【藤縄康弘氏】

Prof. Suzuki introduced and analyzed the Laoian expression (N1+(x)+N2) corresponding to the Japanese "N2+no+N1."

About 30 participants, including lecturers, graduate and undergraduate students from the university and external visitors attended and contributed actively to the discussions.

(Emiko Hayatsu)



【鈴木玲子氏】

インドからみた日本 Japan as seen from India



【ヴァルン・トマルさん】

ジャワハルラル・ネルー大学からの留学生であるヴァルン・トマルさん（研究留学生）に書いていただきました。

一般のインド人にとって、日本は工業製品の中心地であるが、研究者にとっては、宗教、文学、美術、武術の優れた国として見られている。ここでは、日本とインドの宗教の共通点について話をしたい。

仏教が日本に入ってきたのは6世紀であるが、それよりずっと前から極東とインドの間の交流が盛んであった。インド人と日本人は、大昔自然現象と超自然現象についてかなり似た考え方を持っていた。擬人観の概念は両国の人生のあらゆる面にしっかり根を降ろしているようである。彼らにとってこの世のあらゆる生物にも無生物にも神様の要素がある。ヒンズー教と神道の信者は多神教である。インドのカイラシュ山、ガンジス川のように日本の富士山、恐山、比叡山や男体山は信仰の対象である。仏教の伝来とともに、シバ神（大黒天）、ラクシュミ神（吉祥天）などインドの色々な神々も日本に伝えられた。

祖先崇拜は、ヒンズー教と神道の主な特徴である。ヒンズー教の「シュラード」儀式のように、日本でも祖先を祈る「お盆」の儀式が行われている。仏教の導入後、日本での祖先崇拜はより広がった。

ある神話によると、ムダガリヤナ（仏様の弟子）は夢に地獄で彼の母が飢餓で苦しんでいるのを見た。心配した彼は母のため食物と服を送ったが、母のところに着いたとたん、それらは全部燃えて灰になった。彼はこの不幸な出来事を悩み、仏様に相談したところ、仏様はムダガリヤナに母の名においてお祈りをして、食物を捧げるように勧めた。それ以来祖先に毎年供物を捧げる習慣が続くようになったということである。

国と国を繋ぐために文化はとても大事だと私は思う。言語はもちろん人と人とのギャップを埋めるが、文化に触れられると絆がとても強くなる。そして強い絆は国と国の間の経済的・政治的な関係を促進するので、日印の友情がもっと深くなることは大切である。

This essay was contributed by Mr. Varun Tomar, a research student from Jawaharlal Nehru University.

To the average Indians, Japan is the center of industrial products, but to researchers, it is a country with superior religions, culture, the arts, and martial arts. Here, I want to talk about the similarities between Japanese and Indian religions.

Buddhism came to Japan in the 6th century, but exchanges had already flourished between the Far East and India long before that. Both the Indians and Japanese in ancient times had strikingly similar ideas on natural phenomena and paranormal phenomena. The concept of anthropomorphism seems to have become deeply rooted in the people's lives in both countries. To them, all animate and inanimate things living in this world have God-like elements. Hindu and Shinto followers are polytheists. Just like Mt. Kailash and the Ganges in India, Mt. Fuji, Mt. Osore, Mt. Hiei and Mt. Nantai in Japan are also objects of faith. Together with Buddhism, various gods of India such as Shiva (Daikokuten) and Lakshmi (Kichijoten) were also introduced to Japan.

Ancestor worship is a major feature of Hinduism and Shintoism. Like the "shroud" ceremony in Hinduism, there is also an "obon" ceremony praying for ancestors in Japan. After the introduction of Buddhism, ancestor worship spread widely in Japan.

According to one myth, Maudgalyayana (one of Buddha's disciples) dreamed that his mother was suffering from hunger in hell. Worried about her, he sent her food and clothes, but as soon as they reached her, they burned and were completely turned to ashes. A distressed Maudgalyayana then consulted the Buddha, who advised him to offer food and prayers in his mother's name. This was how the custom of making offerings to ancestors annually came to be practiced and is still continued.

I believe that culture is very important in linking countries. It goes without saying that languages can bridge the gaps between people, but if people can touch different cultures, their ties become stronger. As strong ties foster economic and political relationships between countries, it is therefore important for the friendship between Japan and India to deepen.

交流協定校紹介 ⑦ ハノイ国家大学 Vietnam National University, Hanoi(VNU)

昨年10月より公益財団法人博報児童教育振興会「第6回日本語海外研究者招聘事業」招聘研究者として来日され、本センターの特任研究員をされているダオ・ティ・ガア・ミー氏（当該大学東洋言語文化学部 通訳副部門長で本学の博士課程前期修了生）に寄稿をお願いしました。



【ハノイ国家大学 外国語大学】



This report was written by Dr. Dao Thi Nga My (Vice Head, Department of Translation, Faculty of Oriental Linguistics and Culture, University of Languages and International Studies, VNU), the special researcher of our Center, TUFS, one of 7 invitee of the 6th Hakuho Japanese Language Research Fellowship Program since October 2011.

1. University overview

The University of Foreign Studies is one of the six colleges which come directly under the control of the Vietnam National University, Hanoi and is a national university which trains foreign language teachers, interpreters and translators. The "Foreign Language Teacher Training College," which had a history of more than fifty years, was its predecessor and so in foreign language teacher training, it has made remarkable achievements and accumulated years of rich experience.



1. 大学概要

ハノイ国家大学外国語大学はハノイ国家大学直属の6大学の1つであり、外国語教師および通訳・翻訳に関わる人材育成を行う国立大学である。50年以上の歴史を持つ「師範外国語大学」を前身としており、外国語教師の養成に関しては高い実績と豊富な経験を有している。現在本大学には外国語学部が9学部（英語、英語教育、英語圏言語文化、フランス言語文化、ロシア言語文化、中国言語文化、東洋言語文化、西洋言語文化、生涯教育）、1大学院研究科、2直属部門（心理、ベトナム言語文化）、4センター（外国語教育研究及び品質鑑定、遠隔教育及び教員養成、IT、国際教育センター）と1付属外国語専門高等学校がある。講師・職員が7796名おり、学生が11420名（うち正規生は5000名）いる。

2. 大学における日本語教育

1992年に第二外国語としての日本語教育が開始された。1995年に日本語学科を設立し、日本語教育を主専攻言語として開始した。当事通訳・翻訳課程のみ開講したが、2005年、教育訓練省の決議により、ベトナム初の日本語教師養成課程を開講した。同2005年に本大学付属外国語専門高校において、教育訓練省の認可を受けた国内初の高等学校における日本語教育（主専攻）を開始した。2009年に日越友好関係の発展や日系企業のベトナム大量進出を背景に、日本語ができる高度な人材養成を目的に、ベトナム初の日本語学専攻修士課程を開始した。

2011年現在日本語学科の教員・職員が37名、学生が487名いる。

3. 今後の日本語教育

グローバル化が進むとともに国際水準に達する教育プログラム開設及び高度人材養成が急務となっている。その背景では本大学で学部レベルの日本語専攻高品質人材養成コースを立ち上げることに組み組んでいる。また日本語学専修修士課程にとどまらず、近い将来博士課程も立ち上げる予定である。これらのプログラム設立により本大学を始め、ベトナム全土の日本語教育質の向上が期待できると思われる。

4. 国際支援

より高い専門性をもつ人材の輩出のために、本大学は常に国内外の機関の協力、支援を得ながら日本語学・日本文化の国際シンポジウム、集中講座、教材開発などの事業を積極的に行っている。

具体的には2006年から2009年まで、ギソンセメント会社から助成金を受け、日本語講師養成課程のために教材開発、教員養成などの活動を行っていた。

2008年から日越両国友好関係に貢献できる人材育成を目的に、ベトナム三井物産株式会社から3年間の助成金を受け、ハノイ国家大学外国語大学・三井物産株式会社共同講座のプロジェクトに取り組むこととなった。

2010年から国際交流基金の助成金によって、「日本語桜ネットワーク中核」メンバーとなり、日本語教育関係者、日本研究者のための講座開講、教材開発など様々な活動を展開している。

今後とも国内外の組織・個人から支援を受け、ベトナムにおける日本語教育向上に貢献できる事業に取り組んでいく方針である。

There are currently nine faculties of foreign languages (English, English Education, English Languages and Cultures, French Language and Culture, Russian Language and Culture, Chinese Language and Culture, East Asian Languages and Cultures, Western Languages and Cultures and Life-long Education), one graduate research department, two schools (Psychology and Vietnam Language and Culture), four centers (Foreign Language Research and Quality Appraisal, Remote Education and Teacher Training, IT, and the International Education Center), and one affiliated foreign language specialist high school. Altogether, there are 7,796 teaching and non-teaching members, 11,420 students (of which 5,000 are full-time students).

2. Japanese Language Education at the university

Japanese Language was introduced as a second foreign language in 1992. In 1995, the Japanese Department was established, and Japanese Language was offered as a major language. At first, only interpretation and translation courses were offered, but in 2005, the Ministry of Education and Training passed a resolution to make the university the first in Vietnam to offer Japanese Language Teacher training courses. In the same year, Japanese Language (major subject) was offered in the university's affiliated foreign language specialist high school, the first time in Vietnam it was officially approved by the ministry in a high school. Amidst the development of bilateral ties between Japan and Vietnam and the increasing numbers of Japanese companies advancing into Vietnam, the Japanese Language master course was introduced in 2009 with an aim to develop talents highly specialized in Japanese.

There are currently 37 teaching and non-teaching members and 487 students in the Japanese Department.

3. Japanese Language Education in the future

The progress of globalization demands an education program that meets international standards and the development of highly skilled human resources. Toward these objectives, the university is planning on developing a high-level talent development course for Japanese majors at the undergraduate level. Furthermore, it also plans to offer PhD courses in Japanese in the near future. Through the establishment of these courses, the level of Japanese language education is expected to improve not only in the university, but throughout Vietnam.

4. International assistance

In order to produce even more specialized human resources, the university constantly and actively organizes international symposiums and intensive workshops on Japanese language and culture, develops teaching material, etc. with the cooperation and assistance of local and foreign organizations.

Specifically, from 2006 to 2009, Nghi Son Cement Corporation provided subsidies to develop teaching material for the Japanese language teacher training course and to conduct teacher training courses.

From 2008, Mitsui & Co. Vietnam Ltd. provided a three-year subsidy to develop a project on joint courses between the university and Mitsui & Co. Ltd.

From 2010, based on subsidies from the Japan Foundation, the university became a "core member of the JF Nihongo Network," and is organizing seminars and developing teaching material, etc. for Japanese language educators and researchers.

Into the future, the university hopes to continue working with local and foreign organizations and individuals to contribute to the improvement of Japanese language education in Vietnam.

2011年度 活動報告(12月～3月)

Activity Report

■講演会・ワークショップ等■

- 12月2日 国際日本語教育部門主催 言語研究と教育シリーズ
第二回研究会『中国語・日本語対照研究と日本語教育：量の表現』
張麟声（大阪府立大学） 彭広陸（北京大学）
- 12月15日 比較日本文化部門・国際連携推進部門共催 国際シンポジウム
「曲亭馬琴をめぐる三つの提題—白話文学・演劇的表象・ベトナム文学」
神田正行（明治大学） クリスチャン・ペーリン（ロンドン大学SOAS）
川口健一（東京外国語大学）
- 12月17日 対照日本語部門主催 研究会
『外国語と日本語との対照言語学的研究』第5回研究会
宮島達夫（国立国語研究所） 藤縄康弘（東京外国語大学）
鈴木玲子（東京外国語大学）
- 1月23日 社会言語部門主催 講演会
「モバイル時代のコミュニケーションのゆくえ」
三宅和子（東洋大学）
- 1月28日 比較日本文化部門・国際連携推進部門共催 国際シンポジウム
「戦前日本の対回教團政策とトルコ」
メルトハン・デュンドル（アンカラ大学）
三沢伸生（東洋大学） 小松久男（東京大学）
- 3月3日 対照日本語部門主催 研究会
『外国語と日本語との対照言語学的研究』第6回研究会
寺崎英樹（神奈川大学・東京外国語大学）
野村恵造（東京外国語大学） 鈴木智美（東京外国語大学）
- 3月3日 国際日本語教育部門主催 第三回ワークショップ
「日本語と中国語・英語の対照研究と教育への応用」
張麟声（大阪府立大学） 彭広陸（北京大学） 市川淳太（アジア・アフリカ
語学院） 望月圭子、小柳昇、キャロライン狩野、谷口龍子（東京外国語大学）
- 3月21日 国際日本研究センター主催 第4回若手研究者ワークショップ
ダオ・ティ・ガア・ミー（ハノイ国家大学外国語大学）
- 3月23日、24日 国際日本研究センター主催 国際シンポジウム
「国際日本学の構築に向けて」
菅長理恵（東京外国語大学） 日本／W.ウィーラワン（タマサート大学）
タイ／于乃明（政治大学） 台湾／金鍾徳（韓国外国語大学校） 韓国／
趙華敏（北京大学） 中国／蕭幸君（東海大学） 台湾／陳明姿（台湾大学）
台湾／徐一平（北京外国語大学） 中国／藤村知子（東京外国語大学） 日
本／尹鎬淑（サイバー韓国外国語大学校） 韓国／林俊成（東京外国語大学）
日本／白岩広行（大阪大学） 日本／キタハラ高野聡美（リオデジャネイロ
州立大学） ブラジル／任榮哲（中央大学校） 韓国

■海外大学・研究機関調査■

- 3月12日～17日 ドイツ（ハンブルク大学、エアフルト大学、チュービン
ゲン大学、マインツ大学） 成田節（対照日本語部門）
- 3月20日～29日 スペイン（サラマンカ大学、マドリッドカルロス3世
大学） 高垣敏博（対照日本語部門）
- 3月25日～29日 タイ（タマサート大学、シーナカリンウィロート大学）
鈴木美加（国際日本語教育部門）
- 3月27日～4月5日 トルコ（ボアジチ大学、イスタンブール・シェヒル大学、
アンカラ大学） 林佳世子（国際連携推進部門）

■会議歴■

- センター会議：2011年 12月 9日、2012年 1月12日、2月10日、3月9日
- 部門会議：2011年 12月12日、20日、2012年 1月10日、12日、23日、
27日、2月6日

■ Symposiums and Lectures ■

- 2 December: "Language Studies and Education -
The 2nd Research Seminar: Comparative Analysis
between Chinese and Japanese and Japanese Language
Education: Quantifier expressions"
by Zhang LinSheng, Osaka Prefecture University, Japan;
Peng Guangle, Peking University, China
- 15 December: International Symposium - "Three clues
around Kyokutei Bakin: Vernacular Chinese (hakuwa)
literature, Theatrical representation and Vietnam
literature"
By by Masayuki Kanda, Meiji University, Japan; Kristian
Bering, SOAS, University of London, U.K.; Kennichi
Kawaguchi, TUFS, Japan
- 17 December: "Contrastive Study for Japanese and
Other Languages" The 5th Research Seminar
by Miyajima Tatsuo, National Institute for Japanese
Language and Linguistics; Fujinawa Yasuhiro, TUFS;
Suzuki Reiko, TUFS, Japan
- 23 January: Lecture "Future of Social Communication
in the Mobile Era"
by Kazuko Miyake, Toyo University, Japan
- 28 January: International Symposium- "Japan's
foreign policy towards the Muslim world in the pre-
war era and Turkey"
by Ali Merthan Dundar, Ankara University, Turkey;
Nobuo Misawa, Toyo University; Hisao Komatsu, The
University of Tokyo, Japan
- 3 March: "Contrastive Study for Japanese and Other
Languages" The 6th Research Seminar "
by Suzuki Tomomi, TUFS; Nomura Keizou, TUFS;
Terasaki Hideki, Kanagawa University, Japan
- 3 March: The 3rd workshop "Japanese, chinese and
English Languages : Application to Comparative Study
and Education"
by Zhang LinSheng, Osaka Prefecture University, Japan;
Peng Guangle, Peking University, China, Junta Ichikawa,
Asia-Africa Linguistic Institute; Keiko Mochizuki,
Noboru Oyanagi, Caroline Kano, Ryuko Taniguchi, TUFS
- 21 March: The 4th Young Scholars Workshop "Effect
of Chinese origin words in learning Japanese and
Vietnamese as foreign languages"
by Dao Thi Nga My, University of Languages and
International Studies, Vietnam National University, Vietnam
- 23-24 March: International Symposium "Towards a
Construction of International Japanese Studies"
by Rie Suganaga, TUFS; W. Weerawan, Thammasat
University; YU, Nai-Ming, National Chengchi University;
KIM, Jong Duck, Hankuk University of Foreign Studies;
ZHAO, Hua Min, Peking University; HSIAO, Hsing-Chun,
Tunghai University; CHEN Ming-tsu, National Taiwan
University; XU Yi Ping, Beijing Foreign Studies University;
Fujimura, Tomoko, TUFS; YOUN, Ho Sook, Cyber Hankuk
University of Foreign Studies; LIN Chunchen, TUFS;
Hiroyuki Shiraiwa, Osaka University; Kitahara Takano-
Satomi, State University of Rio De Janeiro; Yim Young
Cheol, Chung-Ang University
- Firsthand Examination of Overseas Universities
and Research Institutions ■
- 12-17 Mar. Germany < University of Hamburg,
University of Erfurt, Eberhard Karls University
Tubingen, University of Mainz > Narita Takashi
- 20-29 Mar. Spain < Salamanca University, Carlos III
University of Madrid > Takagaki Toshihiro
- 25-29 Mar. Thailand < Thammasat University,
Srinakharinwirot University > Suzuki Mika
- 24-28 Mar. Turkey < Bosphorus University, Istanbul
Sehir University, Ankara University > Hayashi Kayoko

■ Meetings ■

- Center meetings: 2011 - 9 December, 2012 - 12 January,
10 February, 9 March
- Division meetings: 2011 - 12, 20 December, 2012 - 10, 12,
23 and 27 January, 6 February